



沖

俳句雑誌[おき]

11月号

沖 発行所

良夜微風

能村 研三

谷中の曼珠沙華

能村家の菩提寺は東京谷中の延壽寺にあるが、今年はお彼岸の中日の一日前の二十二日に参拝したので、境内中央にある登四郎の句碑へ曼珠沙華天のかぎりを青充たすの前に植えてある、曼珠沙華がちょうど咲き頃で燃えるような花をつけていた。

この句碑は、登四郎と長年親交のあった小林存道住職の発案で、同じ台東区に住む私の従兄弟の協力を得て、登四郎が亡くなる一年前の平成十二年に建立されたものなので、十年の歳月が過ぎたことになる。

句碑の開眼には体がかなり弱っていたものの登四郎も参列することができたことは良かったと思う。小林住職の後を受けて尼僧の方が住職を引き継がれたが、檀家の私たちとの間でうまくいかず、寺も荒れて墓参りをする度に心を痛めていた。一時は檀家の多くの人が寺に詣でる事をためらうほどの関係にあり、彼岸やお盆法要も落ち着きがないなかで行われ、詣でる度に父をはじめ墓に眠

月あかり砂に磁力の増ゆるかな

土偶みな何かを叫び秋の暮

兎も角も泥くさく生き鯨日和

夜業の灯中に詩稿を敲ける灯

月灯り川のくねりは嫋やかに

遠望に良夜微風の富士刻む

月明の高階望野わが母郷

着たままで釦付け替ふ秋の暮

秋の暮歩幅目安の距離測る

脈々と校風守り草は実に

る先祖に詫びていた。

しかし、私たち檀家がその現状を寺の上部組織に訴えつづけ、五、六年の歳月の後ようやく一年前に新しい住職を迎えることが出来た。新しい竹内ご住職は、市川の中山法華経寺の百日荒行を五回も修行されたご上人で、延壽寺堂内に久々に声量豊かな読経が響き渡った時は感慨を覚えるものがあった。竹内ご住職のお父上は僧侶のかたわら宮沢賢治の研究者としても知られている方であるそうだ。

お彼岸に詣でた日は、檀家が集まっただけの日であつたので、長い間寺のことで愁い、訴え続けてきた仲間同士が再会することが出来たこともうれしかった。

根っからの東京人を誇りとしていた登四郎はこの谷中で生まれ、現在谷中で眠っているが、ちょうど生誕百年目にあたる年、墓で眠る登四郎も寺のごたごたがようやく収まり、やっと安堵した気持ちになつたのではないかと思う。

能村 研三

蒼茫集



空の色

安居正浩

秋の虹終りは空の色になる
寝て起きてまた寝て起きて草の花
まだ国を信じてあたり冬瓜汁
着こなしのよくて案山子の働かず
撫子の咲き少年の日の秘密
川杭にあえかなる波秋はじめ

日の粒

湯橋喜美

けふ白露光りて蜘蛛の一の糸
今にして濡れ縁の欲し月を待つ
月ひとつ身ひとつ後事など多き
群外れて日の粒となる赤とんぼ
萩盛り少し見えくる良き予感
眠り子に残す一灯鉦叩

青春の籠

千田百里

お隣りのやけにしづかな厄日かな
9・11ひとつ釜の飯を食ふ
古書店は青春の籠秋うらら
やや開く秋の扇と胸襟と
釣瓶落しやわれの昭和のめくるめく
月光に押され畳の目のうごく

秋気

高橋あさの

しらかんば触るるや秋気たしかなる
穂芒のあるがままなる戦ぎやう
灯ともして切子にこもる夜のいろ
葡萄ふくむや山の音風の音
冬瓜置く拭きこまれたる框かな
葉鶏頭ふつと真昼の暗みあり

月天心 宮内とし子

月を待つやさしき言葉重ね合ひ
月の客四十五階に集ひけり
己が身の澄みゆく刻や月天心
秋草を描き余白に風生まる
島に一つ寺は鯛鳴くところ
阿久悠の校歌唄ふ子島は秋

オウンゴール 北川英子

唇を舐め新涼の雨の味
標高や銀河洪水のごと現れて
食卓に馴染む小鳥の来て異郷
流星を待つほろほろと砂こぼし
冷まじき明暗一瞬オウンゴール
糺さねば酔芙蓉まだ白きうち

海猫帰る 遠藤真砂明

波の穂も糸のころ草も風なびき
海鳴りは挽歌いわきの夏終る

さんま南下汚染の灘の晴れ渡り
青北風や死者の数だけ海の星
海猫帰る被災わが町がらんどう
潮鳴りの鎮もる施餓鬼太鼓かな

からつぽ 辻美奈子

虫入れて虫籠からつぽより軽し
鉛筆の芯のかがやく星月夜
青無花果のあかんぼのふぐりほど
花野ゆく柔らかうして股関節
神留守の雨が列車を打ちてをり
心臓へかへる血あをし稲光

神の意 荒井千佐代

初秋のまづ耳朶に風来たる
原爆忌ルルドの水の生温し
金星に触るる高さの稲架組みし
爽やかやドロもコルベも丸眼鏡
後ろ手に落暉見てをる 四番
ことごとく神の意さるすべりの紅も

たましづめ

楠原幹子

この国の未来が見えず早星
頽廢てふ言葉古りたり凌霄花
菊月や人肌の白湯あまかりし
一片の雲なき孤高今日の月
月天心大和国原たましづめ
オムレツの黄のふんはりと小鳥来る

船足

松井志津子

灯台のすくりと白き九月かな
船足の早き沖の灯涼新た
石階にさざ波寄する良夜かな
木洩れ日の径木洩れ日のごと秋の蝶
朝顔の午下^ごも咲きゐてふつ切れず
鵜飼川明けて腑抜けの水流る

個性派

森岡正作

自づから昂りゆけり法師蟬
個性派の色なき風をまとひ来る

腕白はもうをらんのか銀やんま
一村のねまりて銀河いよよ濃し
寢床にも今日の名月招きをり
老人のみな礼深き秋彼岸

ときどきは

吉田政江

ひまはりの種の薄謝や町清掃
どの径もせかさるる気の落し水
土壁に水禍の一線月上る
セシウムを測る色なき風の中
露の身の土産と紛ふほど薬
ときどきはあてにされゐて烏瓜

水湛ふかの

田所節子

満月や水湛ふかの深き空
秋光を雀が弾くにはたづみ
スポーツバッグ乗りきて西日焦げくさし
サンングラスどこかはぐらかされてをり
炎天に影をたたみてシヨベルカー
大いなる師の靴のある暑気払

遅れ稿 菅谷たけし

潮浴びの子らに巨きな一つ岩
蟬の穴フアイバースコープなどあらば
来し方のあれこれ過る蔓たぐり
意見なし開いては閉づ秋扇
我もまた夜学子遅れ稿上げる
側溝の蓋かたと鳴る星月夜

感嘆符 成宮紀代子

梨届きましたメールに感嘆符
切れさうな外灯烏瓜の花
船干しの遠流の島の烏賊もらふ
望の夜の黒老松の武蔵ぶり
団塊といふ連帯や登山帽
鯖鮨が故郷の祭運び来し

陽の斑 千田 敬

白は師の好まれし色秋扇
せせらぎに陽の斑せせらぎ虫すだく

里山の餅みじかし鳥威
妻が居てわれもまた居てけふ厄日
黒鍵のひだり左へけふ厄日
語部となり木の実独樂つくりをり

揚花火 鈴木良戈

花莫蔭に背丈伸ばして覚めにけり
入港の緩き船足油照
揚花火風の形になだれけり
新聞の濃き色刷りや震災忌
密教展稲妻遠く走りけり
木場堀の波平らなり今日の月
ちちろ虫 大畑善昭

行く夏の葉焼け多きに天仰ぐ
寝付くまで父よ父よとちちろ虫
秋の雨山の悲鳴に山崩れ
盗まれしりんご三千個とは酷し
一抱へほどの巢の城すずめ蜂
水澄むと石は頭を一つづつ

潮鳴集



スコッチ派

諸岡和子

秋近し鍵も眼鏡も首に吊り
頓服のやうなひと雨秋暑断つ
霧を来て眼大きくなつてみし
スコッチ派バーボン派みて夜の長し
花野行くポシエットほどの愁ひ持ち

坊泊り

渡部節郎

昼月に迎へられての坊泊り
新塔の九輪六三四に秋気澄む
千枚田つまみのやうな藁塚置かれ
豊の秋杵音高く水車小屋
線量が検見の決め手となりしかな

あつけらかん

富川明子

遠流の地銀河濃しともあはしとも
黒揚羽に会ふなんとなくどきんとす
厄日過ぐあつけらかんと街乾き
連弾のしらべや青みゆく良夜
初秋刀魚まだ海泳ぎぬるまなこ

漂白剤

林昭太郎

夏が逝く漂白剤にシャツ沈め
新涼の木綿豆腐に木綿の目
湿らせて使ふ包丁けさの秋
ふくよかに桃の抱ける桃の種
寝かされて棒にもどりぬ捨案山子

沖作品



東京

能美昌二郎

羅やとんぼの翅のごとく着て
相寄りて金魚掬ひのひざと膝
日雷鳴らし天上空つぽに
滴りて岩屋の闇に響き合ふ
ラリツクの昆虫好きや青葉光
戦争はもういたしませぬ芋の花
花ざくろ妻は生来母知らず
未来とは過去かもしれぬかたつむり
長崎忌生あるものは影をもつ
縄文の風の吹く里稲の花
道草をして蝸に囲まるる
どんぐりを土俵の隅に寄せてをく
いわし雲地球小さくなりしかな
わが影に重さありけり秋の暮
葉掘り背に夕日をとどめをり

長崎

岩永充三

岩手

浅沼 久男

能村研三 選

市川市

七田 文子

焦土たりし地に塔美しく盆の風
花火舟魚は寝返り打ちをらむ
花木槿の散りやう紫煙派と思ふ
背筋伸ばせと母の口ぐせ曼珠沙華
秋夕べいづくともなく煙の香
倭の粧の組みあぐ塔や秋澄めり
さつきまでできたパソコンちろ鳴く
黙禱のやうに向日葵花了る
星流る言葉につまる願ひごと
習作の石膏デッサン涼新た
強情を日ごと固めて榎櫃の実
朝顔の数をまづ言ふ朝餉かな
島と島繋ぐ大橋いわし雲
終船を待つ棧橋の良夜かな
今年米一時帰国の子に炊けり

千葉

清水佑美子

埼玉

大石 誠

沖作品 15句選評

*
能村研三

相寄りて金魚掬ひのひざと膝 能美昌二郎

近所の神社の夏祭の思い出であろうか。昔の縁日の定番といえば、金魚掬いやヨーヨー釣り、綿菓子。特に金魚掬いには淡い初恋の思い出があったのだろうか。浴衣をきて、水槽の前にしゃがみこみ、金魚掬いに熱中して膝と膝が触れ合った瞬間は何かときめくものがあった。あーあの時がきつと初恋だったんだらうなど思った。

未来とは過去かも知れぬかたつむり 岩永 充三

未来を引き出すには、まず過去を振り返ることが必要だと言われている。つまり何年後という未来を想像するには過去の記憶を蘇らせ、それまでのいろいろな経験を集集し、それを組み立てることによって、未来を想像していくのである。「ルネッサンス」と言う言葉も、古典の復興から未来への清新な機運を

引き出すことである。かたつむりの動きも未来と過去を行き来しているようにも思える。

いわし雲地球小さくなりしかな 浅沼 久男

コロナプスの頃地球は途方もなく巨大であり、限りなく続く海洋はそのまま怪物にも思えた。しかし、情報化時代を迎えインターネットにより、瞬時に世界を席卷するデジタルネットワークへと瞬く間に変化した。良い事ばかりではない、地球の温暖化により、北極の氷が解け出し、異常気象が起っていることも事実で、この句は地球への警鐘も込められているように思う。

焦土たりし地に塔美しく盆の風 七田 文子

先日の東京句会の押上吟行での収穫作品。時代の最先端を行くスカイツリーが下町押上に立ち上がった。この設計のコンセプトは「シンブル・イズ・ビューティフル」だそうだが、かつて下町の押上は関東大震災、東京空襲と二度も焦土と化した地でもある。多くの方々が亡くなった地でもある。

黙禱のやうに向日葵花了る 清水佑実子

美しく・力強く咲き誇る向日葵の花は、東日本大震災の被災地でも、復興の象徴として被災者を勇気づけた。大輪の花もやがて花時が終り、ややかな垂れてくるとまるで、亡くなられた方々へ黙禱を捧げているようにも見えた。

(以下略)